

# 2

[2012年度入試説明会講演 | 働きながらアーカイブズ学を学びませんか? — 2]

## 自分スタイルの学生生活<sup>[1]</sup>

Let's Study Archival Science: From a Graduate

[報告 | report]

小根山美鈴 | Misuzu Oneyama

### 1 — はじめに:自己紹介・アーカイブズ学専攻入学

大学院入学前の十数年間、私はアーカイブズと直接関係のない職場にいました。学部時代に受講した学芸員実習で史料に触れる面白さを知ったものの、時は流れていきました。

転機が訪れたのは、国立国語研究所という言語研究機関に勤務していた折のことです。第二次大戦中に中国で日本語指導員をされていた方のご遺族からの寄贈資料、ダンボール約100箱分の資料整理を私が担当することになったのです。職場の上司からは「この中から国語研究所に必要な資料だけを取り出して整理し、組織として個人資料を譲り受け際のモデル提案をせよ」というミッションが与えられました。

「資料整理」という業務は私にとって初めてのことです。当時、私は第二次大戦中の日本語教育の語彙研究をしていたこともあってこのミッションにつながったわけですが、どこからどのように着手すればよいのか、さっぱりわかりませんでした。

そこで母校学習院大学の史料館を訪ね、情報収集に努めました。しかし、史料館での目録採取の方法と、今私が担当しているノートやメモ、写真などの雑多な資料の目録採取の方法は、どうやら違うようだということはわかって、それがどのように違うのかわからず、刻一刻と時は流れるばかりです。そ

こで当時、国立国語研究所の研究員として在籍していたアーキビスト(森本祥子氏<sup>[2]</sup>)に相談しました。

森本氏から最初に渡されたのは、『信濃国佐久郡御馬寄村町田家文書目録』<sup>[3]</sup>でした。これを手にして非常に驚きました。私がこれまで見てきた一件単位の史料目録とは異なり、元々の保存状態の構成を活かした形で記された目録だったのです。これは国際標準ISAD(G)の考え方を取り入れた目録編成だったと後になって気づくわけなのですが。

森本氏からの助言を受けながら、なんとか資料整理と研究所への提案を完遂することができました。かれこれ3年弱の年月を要しましたが、この間に私の心の中に芽生えたのは、この不思議な目録を作ってしまう「アーカイブズ」を学んでみたいということでした。折よく、2008年に学習院大学大学院でアーカイブズ学専攻が開設されることを耳にし、後先考えずに入学試験を受け、なんとか合格できたのです。

### 2 — 学生生活:知られざるアーカイブズ学専攻についてお教えします

#### 2-1:私のライフスタイル — 職場と大学の二足のわらじ

当時、私は国語研究所を辞めて物性物理学の大学研究

機関に非常勤職員として勤務しておりました。2008年はアーカイブズ学専攻の開設の年でもあり、同時に、私は第一期生となりました。したがって、この年から晴れて(?)働きながら大学院に通うことになったのです。私の履修状況は、下表の通りです。

社会人学生を念頭に置いた時間割編成とはいえ、土曜を除いた平日の14時台や16時台の授業は非常に厳しいものがありました。修士課程ですと、この時間帯に必修単位の講義があると尚更です。私は現職を辞めてアーカイブズ機関で勤めたいという思いがありましたので、職場に無理を言って勤務体制を変更してもらうことになりました。入学前と入学後の私の働き方は下記のように大きく変わりました。

[入学前]

勤務時間 | 9:00 - 18:00 (月-金) 週40時間

↓

[入学後]

勤務時間 | 9:00 - 15:00、9:00 - 12:00(月-木)、  
9:00 - 18:00(金) 週26時間

非常勤職員とはいえ、かなり時間を削減することになりました。しかも、修士論文のために地方で資料調査を行っておりましたので、有給休暇もかなり取得しておりました。

それだけ収入が減る覚悟も必要でしたが、幸い職場の上司は勉強することに寛容で、周囲も驚きはしたものの、結果的に私の要望を受け入れていただくことができました。働きながら大学院生活を送るには、学問という得るものがある代わりに、自分の生活を、多かれ少なかれ、犠牲にしなければならないことは覚悟する必要があります。

現在、私は正社員として働いておりますが、上記の履修状況で働くことは到底無理だと思います。社会人を対象にしているならば、19時30分以降の授業を設けるなど、全体的に時間を後ろにずらしていただけると、今後、社会人にとって受講のハードルがもう少し低くなるのではと思います。

授業時間以外でも、文献調査やレポートの課題に追われました。試験が無い代わりに、各科目でレポートが課されます。さらに、授業での発表資料の準備も必要です。それ以外に自分の修士論文のための研究とゼミ発表の資料作りに追われますので、私の修士生活2年間は、冗談ですが「恋愛禁止のアーカイブズ学生生活」だったとも言えます。

どうしても2年間と言わずに、3年、4年と幅を持たせて少しずつ履修する方法も考えられます。その代り、修士課程に在籍している限り、研究活動もそれだけ延びることになり、こと修士課程の場合は期間を延ばせば延ばすほど、プレッシャーは重くなると思います。これはあくまでも私なりの考え方です。

表 —— アーカイブズ学専攻 私の履修状況(当時): 通算2年間

	月	火	水	木	金	土
1 9:00-10:30						アーカイブズ学理論 研究Ⅲ [海外文献研究] (保坂)
2 10:40-12:10						アーカイブズ・マネジメント論 演習Ⅱ [情報処理論] (入澤・幸田)
3 13:00-14:30						アーカイブズ学演習 (安藤・保坂)
4 14:40-16:10			アーカイブズ学理論 研究Ⅱ [アーカイブズ史] (安藤)			アーカイブズ実習 (安藤・保坂)
5 16:20-17:50	アーカイブズ・マネジメント論 演習Ⅰ [整理記述論] (大友・加藤)	アーカイブズ・マネジメント論 研究Ⅲ [保存論] (安江)	アーカイブズ・マネジメント論 研究Ⅱ [レコマネ論] (高山・古賀)	記録史料学研究Ⅲ [東アジア記録] (武内)		
6 18:00-19:30	アーカイブズ・マネジメント論 研究Ⅰ [管理論] (安藤)	記録史料学研究Ⅱ [近現代記録] (前) (中野目)		アーカイブズ学理論 研究Ⅰ [基礎理論研究] (保坂)		

[アーカイブズ学専攻の修士課程修了時に得られるスキル]

- 1. アーカイブズ学の学問的知識と  
マネジメント(実践)の知識
- 2. アーカイブズ資料の保存科学等の技術的知識
- 3. アーカイブズ学界における世界と日本の現状把握
- 4. 文献・資料調査の方法
- 5. 論文というアウトプットの方法

上記5点が、私の考えるアーカイブズ学専攻の授業を履修することで得られるスキルです。

1から3については、学習院大学大学院アーカイブズ学専攻の特色でもある部分で、これが専門職に必要なスキルとして求められる部分でもありますので、最も重要です。

一方、意外と重要なのが4,5の項目です。これらはアーカイブズ学専攻に限らず他の研究領域の大学院生にも問われる部分であり、難しくもあるスキルです。アーカイブズ学は情報学とその類縁領域であるように、たくさんの情報(紙媒体であろうがデジタル媒体であろうが)を目の当たりにします。4については、それらの数ある情報の中で、自分の目的とする問題・課題に関する情報を的確に選び取る必要があります。そして、5では1から4までの工程を経た上で言わば「成果」を形に表さなければなりません。この工程を終えれば、今後の研究活動や仕事においても自信の持てるスキルとなります。

博士後期課程の場合ですと必修科目が格段に減りますので、他大学で修士を修めた方にとっては、博士後期課程に進学して研究に邁進するということも可能です。

## 2-2: 授業風景

授業形式の類型について、私の履修した主な科目を以下の3つの型に分類してみましたのでご参照下さい。

[授業類型]・いずれも当時です

### 1. 講義型

- 記録史料学研究Ⅱ[近現代記録]
- 記録史料学研究Ⅲ[東アジア記録]
- アーカイブズ学理論研究Ⅰ[基礎理論研究]

### 2. 講義プラス参加型

- アーカイブズ・マネジメント論演習Ⅰ[整理記述論]
- アーカイブズ・マネジメント論演習Ⅱ[情報処理論]
- アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅰ[現代アーカイブズ管理論]
- アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅱ[レコード・マネジメント論]

- アーカイブズ学理論研究Ⅱ[アーカイブズ史]
- アーカイブズ学理論研究Ⅲ[海外文献研究]
- 3. 講義プラス見学型
- アーカイブズ・マネジメント論研究Ⅲ[保存論]

全体的に講義と発表、それに関するディスカッションが多い授業形式です。今後、学生発案型のディベート形式を取り入れると、刺激的な授業になるかもしれません。

## 2-3: 実習と研修旅行

実習は1・2年目共に必修科目です。東京・神奈川近辺を中心としたアーカイブズ機関が実習先となり、1年目は先生方より割り振られた各機関に2名ずつ配属され、2年目は自分の希望と相手機関の受入体制が整えば、その機関で実習できるシステムでした。私は1年目に国立公文書館、2年目には修士論文で取り上げたい文書を所蔵していた、愛媛県西予市城川文書館で実習をさせていただきました。

1年目の国立公文書館では、2期に分けて実習が行われました。1期目は国・地方公文書館等の職員を対象に毎年実施されている公文書館等職員研修会(現在の「アーカイブズ研修Ⅰ(初任者研修)」[4])に学生として参加し、2期目は個別に公文書専門官それぞれに直接指導を受ける、というプログラムでした。1期・2期を通して当時の高山正也館長にも直接ご指導いただくなど、実習1期生でもある私たちにきめ細やかな対応をしていただき、日本の公文書管理体制の第一線を直接肌で知ることができました。

愛媛県西予市城川文書館では、元々の文書館創設のいきつが地域の歴史家による公文書館運動に端を発しており、国立公文書館とはまた違った意味で地域ならではの職員の奮闘ぶりを垣間見ることができました。同時に、近隣の市町村の文書保存庫も見学させていただき、何かと苦勞の多い地方自治体の現実を突き付けられた思いがしました。

研修旅行では、2年間を通して様々な所へ行くことができました。国内では沖縄、栃木、茨城の公文書館や歴史資料館、海外では韓国国家記録院などの関係機関、私は行けませんでした。中国研修では中国人民大学や北京市檔案館等に行きました。

一人ではなかなか行けないところばかりですので、机上で勉強するよりも何倍も貴重な体験になります。

現在在籍している学生さんの中で、「論文が忙しくて行けない……」という方がおられたら、今の私でしたらこう言うでしょう。

「論文は後回していいから、行った方がいいよ」と。

## 2-4: 一期生ならではのこと

2008年のアーカイブズ学専攻の一期生は、私を含めた修士課程学生8名、博士後期課程学生4名の総勢12名でした。入学式の後、研究棟の一室で懇親会が行われました。学部時代も学習院大学だったのは私を含め2名で、それ以外の院生は他大学の出身者、かつ、ほとんどが社会人でした。皆さん大人の世界で苦労されている方なので、どのような学生生活になるのだろう、難しい駆け引きなどが増えるのかな、などとちらりと思わずにはいられていませんでしたが、それは杞憂でした。

学問の前では誰もが平等である、ということを実感したのと、一期生の皆さんはなんにでもチャレンジなこと、学生生活の中で置かれた状況を少しでもよくしようと、時には先生方をも交えながら話し合う機会が多くあった、ということがとても印象的です。

例えば、夏休み前に専攻閲覧室で博士後期課程の学生の方からお薦めの参考書を教えてもらう茶話会を企画したり、研修旅行前に学生による自主的な研究会をおこなったり、外部の研究会や勉強会等に積極的に参加し、その情報共有を盛んにおこないました。

大学の生き残りをかけて、カタカナ文字系の学科が他大学でも増えていることもあり、このアーカイブズ学専攻もそのうちのひとつなのではないかとは思われたくない、れっきとした純粋な学問である、ということ私たちは証明したかったのかもしれない。

このように、一期生の専攻との関わりかたは、先生方の授業のことも及ぶなど、「アーカイブズ学専攻のあり方」そのものについて喧嘩諍々と議論を展開し、専攻の教員と学生が一緒になって、実り多い専攻にしようとしたことが印象的でした。

## 2-5: 大学院生室では

現在の文学部研究棟(北2号館)とは異なり、当時は別の建物(東1号館)の8階にアーカイブズ学専攻の大学院生室がありました。私たちが入学した頃の院生室の書棚には十分な研究文献は決して多くはありませんでした。専攻側で年間の書籍購入予算がありましたので、学生2名が図書係となり、毎月学生全員に図書購入の希望をメールでやり取りし、それを取りまとめて購入すべき書籍を専攻で購入していただく、というシステムをとっていました。当初は私ともう一人の方が図書係を担当し、海外文献を中心にどんどん書籍が増えてい



き書棚が埋められていく状態を見て、やはり、この専攻に入学された皆さんはすごいなと思ったことを覚えています。

## 2-6: 授業後、目白界限で…

アーカイブズ学専攻に入学する学生は、社会人がほとんどです。皆さんそれぞれに忙しく、授業が終わるたびに先生方と飲み会に繰り出る、ということはなかなかできません。それでも、季節の変わり目や前期・後期の節目になると、先生を交えて授業ごとに交流会(飲み会)を催しておりました。海外の先生との交流会の際[5]、先生の横で流暢に通訳する同期の方が大変頼もしく見えました。

このような交流会は、先生方とざっくばらんに話ができますし、私たち院生同士がお互いを知るよいきっかけにもなりました。

## 3 — 学生生活:

### 知られざるアーカイブズ学専攻の研究活動

#### 3-1: ゼミの風景

アーカイブズ学専攻における必修単位の中でも、最も苦難を強いられるステージ、それはゼミです。アーカイブズ学専攻



はただ「アーカイブズ学を学ばばよい」、というわけではありません。学んだことも織り交ぜながらそれを研究というレベルに引き上げなければなりません。これが至難の業です。一期生の私たちは先輩の論文を参考にすることができず、「アーカイブズ学とは何か」を自問自答しながら取り組むわけです。ゼミの発表も誰一人として同系統の題材を用いている人はおらず、先生方も苦慮されたのではないかと思います。

当初のゼミは指導教員ごとに分かれることなく、合同で行っておりました。その後、指導教員ごとに分かれてそれぞれ発表していくわけなのですが、手厳しい指摘を受けることも度々あり、何がアーカイブズ学的な研究なのかについて混乱した時期もありました。しかし、対象は別々の研究でありながら、より充実した成果をあげるために一緒に考え議論する経験は、他では味わえない院生の醍醐味です。

### 3-2: 指導教員と研究相談をしながら修士論文執筆へ

私の指導教員は、安藤正人教授でした。大学院に入ったらこの世界の第一線の先生に教わりたくかねてから希望していたので、それが成就してワクワクしたのもつかの間、自分の修士論文の研究テーマについて思い悩む日々が続きました。「アーカイブズ学の研究ってなんだろう」という疑問です。他の分野の研究をやっている方がこれを聞いたら笑われてしまうかもしれません。

悩んだ末、まずは「一次史料」を対象にし、安藤先生がご研究されてきた手法を私もたどってみようと思惟しました。自分の興味対象であった「人の移動の記録」「戦中・戦後」「公文書」という少ないキーワードを頼りに、愛媛県西予市城川文書館での資料調査を開始しました。当時、地方へ飛び込んでいった学生は私以外にいなかったと思います。大学からの助成金を獲得し、愛媛県との往復をしておりました。

安藤先生からはよく、「自分の研究ノートを作りなさい」と言われました。そして、調査した資料の構造を「図示できるようにせよ」ともアドバイスいただきました。

ゼミ発表前に頭の中が混乱した折に、先生が「まずは考えることを言ってみなさい」とおっしゃってくださったので、思っていることをありったけの言葉で先生にぶつけることもままありました。先生は熱心に聞いてくださり、その後、適切なアドバイスをしていただきました。学生はとにかく先生にはまとまった形で研究報告をしたくなるものですが、そうでなくても、しっかり受け止めてくれる先生に常々感謝しております。

修士論文執筆時は、私の職場の先生方も執筆場所を提

供して下さり、ほぼ住み込み状態で、他の物理学の論文執筆をしている学生に交じって執筆しておりました。多くの皆さんに支えられた学生生活でした。

## 4 —— 進路: 就職

修士論文を無事に執筆し終えたものの、内容そのものに反省すべき点も多くあり、引き続き大学で研究を続けるか、それとも当初の予定通りにアーカイブズ関連機関に転職するかどちらかで悩みました。しかし、悩みはすぐに吹っ切れました。私はアーカイブズ学を「実学」と考えているので、実践の場に身を置くことが自分にも合っていると思いました。また、修士論文というへビーなことを仕事と両立しながらなんとか頑張れたので、また研究がしたくなったら両立させよう、と思ったのです。

さっそく転職活動を開始しましたが、アーカイブズに関連する仕事の募集が非常に少なく情報入手に苦勞すること、アーカイブズ関連機関の募集においてもアーカイブズ学の認知度が低かったため、第三者にアーカイブズ学について説明しなければならないことが多く、難儀しました。しかも、このような機関での採用は非常勤職員がほとんどです。この現状を知り、私はいったん転職活動を中止しました。

アーカイブズを組織的に推進していくには、アーキビストが組織内である程度の発言権を持たなければならない、という私なりの考えがありました。したがって、今は難しくても正社員の道を探そうと思惟しました。そんな中、現職である株式会社出版文化社のアーキビストの募集に出会いました。場所は大阪でしたが、開拓精神をもって関西に赴任し、現在に至るわけです。

## 5 —— 現在: アーキビストとして

上述のいきさつで現職に至るわけなのですが、アーキビストとして採用されたので「アーキビスト」を正々堂々と名乗れることが嬉しく、また、アーカイブズのことを仕事として一日中それに没頭できることにわくわくして大阪に赴きました。しかし、現実にはそれほど簡単に私を受け入れてくれませんでした。

大阪に着任して二日目に、企画・提案書を作成するように言われ、ベソをかきながら書いたことを覚えています。この会社でのアーキビストとは、自ら資料整理の現場作業に直接作業員として携わるのではなく、スタッフを使って複数の案件をこなすためのマネジメント業務が主体であること、自らの組

織ではなく知識・技術を大学や企業等へ提供するビジネスである、ということに特徴があります。ですので、親組織のアーカイブズのアーキビストならではのやりがいや課題等を私は共感することは難しいですが、お客様を通して色々な案件に携われることと、ヒト・モノ・カネの管理を徹底的に訓練できることにやりがいを感じています。

## 6 — 入試説明会での質疑応答

2012年10月の入試説明会で講演させていただいた時に多く寄せられた質問は、「どんなところに就職できるのか」ということでした。今では日本アーカイブズ学会登録アーキビストの資格制度ができたものの、就職口という受け皿が非常に少ないと思います。この質問に対する私の答えは、「アーカイブズ学専攻に在籍していれば情報収集が多くてできるし、相応の就職口の話もいくつかあるでしょう。しかし、正社員・正職員になりたければ公務員試験の行政職を受験するか、民間企業の総務課や広報課に勤務するという方法がより着実な道かもしれない。アーキビストとしての職は得られなくとも、学んだことを活かせる可能性があります。」とさせていただきます。

## 7 — 入学を志す方へ：ささやかなメッセージ

これを読んで、アーカイブズ学専攻への入学をためらってしまう方がいるかもしれません。アーカイブズ学そのものを即実践に応用するには一定の訓練が必要ですが、アーカイブズ学をきちんと学ばなくては出来ない仕事があります。

私が、数多くのお客様に向けてアーカイブズのビジネスを行っている中で気づいたことは、専門的に学んだことを応用するのと、そうでないのとでは、成果がまったく違ってくる、ということです。この点がアーキビストの「プロ」の「プロ」たるゆえんだと思っています。

例えば、お客様から資料整理のご依頼があったとします。そのご依頼内容は室内全体を対象とした資料整理ではなく、棚にある一部の資料だけが対象だとします。そうした場合、資料の整理をすぐに開始するのではなく、まず室内全体の資料について事前に調べ、全体の中での対象資料の位置づけをお客様にお伝えします。その上で、ご依頼の対象である資料について一つ一つを調べ、整理の段階ごとの工程を作成し、目録を1点単位でリスト化する必要があるのか、まとまり単位でリスト化したほうが良いのか、あるいは対象資料

の前後にあるものとの関わりからもう少し整理の対象を広げ方が良いか、というようなことを含めて、改めてお客様とご相談をします。お客様としては、ただ「整理」をしてくれればそれでよい、と思っていたのに、整理という過程に段階や奥深さがあることを知り、初めてお客様ご自身の資料に対する関心を持つ機会となる事例が、多く見受けられます。また、その場限りの整理で終わることなく、お客様にどのように継続して維持・管理してもらえるかを模索し、体現することができます。

このようなことができる秘訣は、調査・ヒアリング等を行うことを通じて、「一部分の資料」から室内の保存環境や資料構造、お客様も気づいていない課題等がダイナミックなイメージとして見えてくることに内在しています。このことは、アーカイブズの原理・原則を体系的に学んだこと、大学院で専門機関を数多く見て回ったこと、様々な方々と多く交わした議論などによって、現状と未来にあるべき姿を予測できる「技」を学んだゆえであることに尽きます。社会と密接に関わって存在するこの学問には、あらゆる仕事の局面において「使える」多様性があると思うからです。

是非、アーカイブズ学を学んでみて下さい。あなたの視野は確実に広がりますよ。

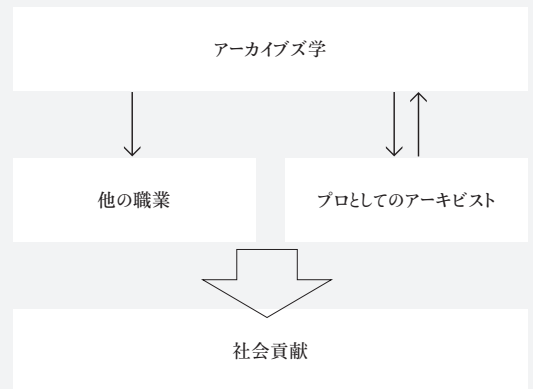


図1 — 多様なアーカイブズ学のイメージ

- 1 — この講演は2012年10月20日(土)に開催された、入試説明会に伴う講演会「働きながらアーカイブズ学を学びませんか? — 在学生・修了生の声」の記録である。2009年度に博士前期課程を修了。
- 2 — 森本氏はその後、アーカイブズ学専攻の初代助教として2009年度—2012年度の期間、本専攻に在職されました。
- 3 — 史料館所蔵史料目録第78集(国文学研究資料館史料館、2004年3月)
- 4 — 国立公文書館の各種研修ページ: <http://www.archives.go.jp/about/activity/conference.html>
- 5 — 例えば、2008年10月、外国招聘研究者として約1週間滞在されたDavid Gracy先生(テキサス大学オースチン校情報学アーカイブズ学教授)などの先生方と交流できました。